



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.204
2020.9.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— E.S. モースと坪井正五郎のはざまで —

鈴木 正博

● 第35回 ● ソネの土器とコロボックル考古学

承前・補遺。坪井正五郎は濱田耕作からの問い掛けを受け、実際のデータを用いた形態学の基本的分析法とそれに基づく帰納的な論理思考を丁寧に伝えようと腐心する。然るに濱田耕作はあろうことか土俵の『東京人類学会雑誌』から退場し、『考古界』へと逃げ込み、後出しジャンケンも添えながら「我が天孫人種」先入観から同じ反論を繰り返し、論争の是非を『考古界』に押し付け自己完結する。喧嘩を売りつけ逃げる性格により、最先端の人類学的考古学による教育機会を自ら放棄するだけでなく、後年にはペトリのSD法すら誤解する。この濱田耕作の「我が天孫人種」先入観論議は後代のミネルヴァ論争にも通じ、往時の常識に囚われる国史志向への教訓として日本考古学史に刻印されるが、今でも繰り返される。山内清男の加曾利B式研究に学ばなければ、大森貝塚の主体的一群の土器を何の根拠もなく加曾利B式の標準として流布させる摩訶不思議な姿勢は厳に慎まなければならない。高井東式の母体は縄紋式も今も大森貝塚を形成する主体的な系統であり、その系統の変遷は決して曾谷式を生成する加曾利B式の変遷を実態化しない。

閑話休題。「コロボックル考古学」の新たな展開は諏訪湖ソネの湖底調査成果(明治42・43年)で頂点を極める。何故ならば、その直後(大正2年)にはサントペテルブルグに海外出張中、50歳の若さで客死し、没後は鳥居龍蔵が人類学教室の後任となるからである。石器時代アイヌ説が全盛期を迎えつつも、「コロボックル考古学」は遺蹟形成論として確かに鳥居龍蔵が継承する。

坪井正五郎が2年掛けて7回連載した「諏訪湖底石器時代遺跡の調査(上)(下のノ一)(下のノ二、全編完)」・「諏訪湖底石器時代遺物

考追記(一)(二)(三)(四)」は、100年後に再び脚光を浴び、遺蹟形成論から遺物の形態学的研究に至る総括を目指して刊行される(曾根遺跡研究会編(2009)『諏訪湖底曾根遺跡研究100年の記録』)が、坪井正五郎の土器についての学問は伝わってこない。

その100年前に坪井正五郎は土器の特徴に注意を払い、形態学を通して往時の地域社会を考察する。「コロボックル考古学」は人種論の衣を纏いつつも、本質は遺蹟・遺物を通して人類の生活や社会を復元する体系的な方法論である。土器の扱いでは大森貝塚のモース製土器標本を標本板から剥ぎ取る逸話が思い出されるが、学問的な含意は権威からの解放に認める。即ち、考古資料は鑑賞が目的ではなく、形態学の自由な観察対象として意義がある、との篤い思いを知る。

ソネの土器は「追記(二)」の7項目の観察所見[土器][土器の厚さ][土器の形状][土器の大きさ][土器の用][土器の模様][土器破片の廃物利用]から、全て小片で、形態・装飾の識別可能なものについては厚手(厚さ「三分」と「二分五厘」)の縄紋模様2点(縄紋式中期)を除いて、130点が薄手(厚さ「一分五厘」から「一分」が大部分)の爪形模様という特徴が明らかとなる。勿論、「土器破片の廃物利用」は厚手の縄紋模様である。しかし、ここで終わらないのが坪井正五郎である。

「追記(三)」ではこれらの観察を一步進め、湖辺の遺蹟・遺物も近隣の生活圏として比較の視野に入れ、例によって比較形態学の土俵に持ち込み、6項目(ゴチック体は引用者、以下同様)[土器に二種類有る所以][湖辺発見の土器片][湖辺土器の厚さ][湖辺土器の模様][二類の土器の関係][湖底遺跡と湖辺遺跡との相異は何事を示すか]の順次検討により課題生成から結果導出に至る手続き

の論理性と比較分析の総合性が窺われる。

詳細は省略に従うが、湖辺土器が厚手で湖底土器のみが薄手となる[二類の土器の関係]では、(い)先祖と後裔という年代の違い、(ろ)断続する年代の違い、(は)同一時代の部落の違い、の三者関係に対し、年代が継続する場合には中間形態の視点から、年代が断続する場合は土地選択の視点から絞り込み、消去法により「同時代異部落」の者の手に成ったと云ふのが両所土器不一致の最も真らしい説明の様で有ります。」とするも尚確証に至らないと承知する。

そこで「両所土器不一致」だけでは必ずしも「同時代異部落」に至らないとの認識が示されるや、即座に進むべき次の途は「湖底遺跡と湖辺遺跡との相異は何事を示すか」と準備されている。湖底と湖辺に関する両所の不一致は土器に限らず、石鏃にも一致しない点を見出し、更にはそれ以上の違いとして居住様式が問題とされる。即ち、「同時代に於ての事としても、別時代に於ての事としても、共に住む方の違ひ」という事が心に浮ぶので有ります。一方は陸上生活、一方は水上生活と仮定して見ると遺跡の違ひの事が容易く理解出来るので有ります。」というように、石器時代諏訪湖をめぐる「両所土器不一致」の現象は、「同時代異部落」よりも、年代差の有無も包括する所謂「両所生活様式不一致」に強い相関を求め、往時における地域社会の復元へと接近する。

畢竟、諏訪湖ソネの湖底とその周辺遺蹟に観る坪井正五郎の比較形態学「両所土器不一致」は、今日でも大森貝塚と椎塚貝塚における「両所文様不一致」及び「両所文様変化不一致」の先史考古学として加曾利B式研究で継承され、加曾利B式の真相を穿ち、地方的な「細別」へと至る経緯がある。

※巻頭連載は隔月です。今回は大村裕さんです。

目次

■加曾利B式土器 ソネの土器とコロボックル考古学(第35回) 鈴木正博 …1
■考古学の履歴書 ことのはじまり(第28回) 間壁忠彦・間壁霞子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第197回) 天久瑞香 …3
■考古学者の書棚 『日本考古学協会2020年総会 発表要旨』 忍澤成規 …4

考古学の履歴書

ことのはじまりー「..それでは 何だ」(第28回) ————— 間壁 忠彦・間壁 霞子

6. 吉備真備の祖母骨蔵器(和銅元年・罔勝・罔依母夫人の墓誌銘を刻む)・「それでは何だ?はまだまだあった」(5)

わが国での数少ない奈良時代の、墓誌や石碑的なものの中では、少々性格は違うが、薬師寺の仏足石の刻文中(753年)に「夫人」の文字が見られたことを先回示した。しかしこの場合は、夫の文室真人智努は、言うまでもなく天武天皇の孫、智努王が皇籍を離れて後の名で当時従三位下であった。しかも彼の父である長親王は、その母は天智の皇女大江であるから、大津皇子などと同等の立場である。父系身分をいえば、智努王は、長屋王以上ともいえる。またここで「亡夫人」と記された智努王の妻も、従四位下の位を持つ茨田郡王で、「王」とされるから皇族の一員である。

文献史料としては、当時の人物伝記として知られる「上宮聖徳法王帝説」(『寧楽遺文下巻』)などには、聖徳太子の妻を「膳大刀自」とも「膳夫人」とも両者の呼称で記されている。

奈良時代といえば文献史料以上に、基本的な史料に成り得る、藤原京・平城京跡出土の、膨大な木簡や墨書・刻書土器類がある。奈良時代の重大な政治事件の主人公であった長屋王の、邸宅跡出土木簡も膨大なものである。これらの中で「夫人」使用はどのくらいかと、全てとはいえないが、手元の関係文献などで検討した。

こうしたなかで『平城宮木簡一〜五』(真陽社)の索引で「夫人」字を唯一つつけ出して、勇んで本文を見て笑ってしまった。それは「人夫」の書き違えで、その木簡は、あと習字用などに、転用されたものだった…というほど見られない文字であった。

ところが『長屋王家木簡一』(吉川弘文館)によると、長屋王が「長屋親王」と記されたものが注目を集めたが、それだけでなくこの夫人呼称も通用する世界だったのだ。この点は、先の智努王家等と同様、皇位継承権のあるような王族一家の中では、通用する呼称だったと思われる。

しかしそれが奈良の都での一般的役人の家庭内で、普通に通用していたと見る証明はない。多くの人の尊崇を集めた僧侶の場合でも、天平21(749)年己丑の銘を持つ僧行基の舍利瓶記では、母を「..蜂田氏諱古爾比売」としている。

それでは、あの則天文字が使用されていた中国ではどのような状況であったのだろうか。中国のことは全くの門外漢だが、たまたま手許に『唐代墓誌彙編 上巻』周紹良編(上海古籍出版社 1992年)があった。20世紀初頭に洛陽邙山一帯で数千枚の墓誌が発見された物の内、上巻には武徳(618年)から光化(898年)までの2,539点が収録されていた。この中には則天武后時代の墓誌も226点含まれている。ただ残念なことに、現代の中国文字でこそない漢字本だが、写真や、拓本などでないため、則天文字の部分は書き換えられていた。しかし他の資料から見て、この時期の墓誌には則天文字がしっかり使われていたようだ。

中国の墓誌には基本的には、題名がついておりそれは『唐(個人名)墓誌 銘并序』と言うように、国名と主人公の名前

に「銘并序」が付くのが原則。ここでの「銘」とは特に本人を追悼する詩文的言葉のことで、「序」の方が当人の出身地や身分・履歴や家族構成など詳しい部分なのである。またこの題名に〇〇夫人としたものも多い。この本の中で、特に則天文字使用期間と見られるものの中で、男性名170点に対し、「夫人」の付いた女性の物が45点存在した。また題名は男性だがその文中には、夫人として記された名のあるもの41点、明らかに夫人と合葬としたもの22点などあって、妻に対する呼称が「夫人」が一般的だったとともに、ほぼ夫人は男性と対等に扱われている。しかもこれらの墓誌は、いわゆる中流家族の官人や武人・商人などの層らしく、王族層も加わっているが、特に貴族階級などというものではない。

多くの文化を受け入れ、渡来人も多かった朝鮮半島の場合、『日本書紀』の中に残された『三国史記』の中に「母夫人」があった。高麗の建国王の話で、彼の「母夫人」とされた女性は、実は黄河を支配する神・河伯の娘とされている。また同書の百濟本記にあるとして、高麗の王には三人の夫人がいた。なども記している。この夫人には古訓として「オリクク」とルビがつけられている。わが国では「夫人」の古訓として『日本書紀』までは「トウジ」、『続日本紀』では「ブニン」である。それぞれの国での、特別な地位の女性の呼び名を「夫人」という漢字に当てたということだろう。明らかに中国との実態とは異なり、わが国も、朝鮮半島でも特別な貴族層の女主人の人物に対する敬称的な呼び名といえよう。

わが国では真備祖母墓誌以外の墓誌中の女性には、明らかに渡来系氏族の女主人もいたが「夫人」呼称はない。わが国では当時すでに「夫人」は特別な呼称と理解されていたといえよう。

このように「銘」字使用も、則天文字使用も「夫人」呼称も、まったく特別なものが、吉備真備祖母の骨蔵器の文面である。しかも骨蔵器まで特異なものだったというべきだろう。

次回では骨蔵器の形態からも、真備祖母のものが地元吉備に於ける製品だったことも見ておきたい。

間壁忠彦 略歴

1932~2017年 岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる

1951年 岡山県立操山高等学校卒業

1955年 岡山大学法文学部法学科卒業

1954~1973年 (財)倉敷考古館学芸員

1973~2006年 同上館長

1968~1998年 広島大学、1968~1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に

熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講

就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学

非常勤講師出講

2006~2015年 (財)倉敷考古館学術顧問

間壁霞子 略歴

1932年 岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる

1951年 岡山県立操山高等学校卒業

1955年 岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業

1955年 岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)

1956~2015年 (財)倉敷考古館学芸員

1979~1986年 中国短期大学非常勤講師(歴史学)

1985~2004年 神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)

教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授

1995年 明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。次回は井川史子先生です。

Jレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 197

真珠道跡(識名坂地区)～沖縄県那覇市

天久 瑞香

「真珠道」とは琉球王国の尚真王(1477～1526年)の時代に首里城の北側外郭と観音門・久慶門とともに整備された道路である。首里城の第二坊門であった守礼門の南東側、園比屋武御嶽石門の向かいに起点がある。起点の東西両側には道の完成と国王の徳を称えた記念碑が建立されており、その碑文には真珠道整備の年代として1522年が記されている。道は首里城から南側に向かい、首里金城町を通り識名を抜け、国場川に架けられた真玉橋を通り那覇港南岸の垣花へ至る。1553年以降に屋良座森グスクが整備されると真珠道も併せて延伸され、総延長約10kmとなった。

王都首里から那覇へ延びる道は一般の交通の便に供するほか倭寇対策の一環で整備された軍用道路としての役割も考えられている。

現在、真珠道としてよく知られるのは那覇市の「首里金城町石畳道」である。首里城の南側にあたる首里金城町の集落中央を下る全長約300m、幅約4mの石畳道には、大きさ20～30cm程の琉球石灰岩を用いて「乱れ敷き」という手法で石畳が敷かれている。沿道の屋敷囲いにも琉球石灰岩を用いた「あいかた積み」の石垣が残る様子は、石畳と調和して城下町の風情を残しており、戦火を免れ古都首里の街並みを今日に伝える貴重な史跡・名勝として沖縄県の指定を受けている。

私が今回紹介するのはその真珠道の一部にあたる「真珠道跡(識名坂地区)」である。先に紹介した首里金城町石畳道から南側に約200mほど離れたところに位置しており、「坂」の名のとおり勾配が15度をはかる急な坂の部分にあたる。道路の改良工事に伴って平成30年度に発掘調査を実施した。



▲石畳道検出状況(東から)

今回の調査では、東西にのびる長さ約18mの石畳を確認した。幅は約0.9mであるものの、北側においては道の縁であると考えられる。調査区の南側は歩行用道路として供用中でコンクリート舗装のままだったため、縁石の確認はできなかった。石畳の検出状況や工事図面からすると既に配管工事による破壊を受けていると考えられる。同じ真珠道である首里金城町石畳道では道幅は平均約4mあるが、米軍撮影空中写真や1950年代の写真を見る限り、識名坂の道幅のほうがやや狭く2.5m前後であったと思われる。

石畳に設定した横断トレンチ断面にて下部構造を観察したところ、敷設は以下の順番で行なったと思われる。

- ①山を削ったり地盤である岩の上に土を入れたりしてある程度平坦にならす。
- ②拳大の石灰岩礫を敷き詰め土を入れる。

③厚さ10cm程度に粘土質の土を入れる。

④石を角錐状に加工し、尖った方を下向きにして粘土層に押し込んで固定する。



▲角錐状に加工された石畳の敷石

石畳を敷設する際に粘質土や石灰岩礫を混ぜた土を造成土として用いることは、県内の他の石畳道でも見られる。敷石の加工を板状ではなく角錐状に加工するのは、造成層に対して密着度を高め、敷石が脱落しないよう工夫した方法であると考えられる。敷石の摩耗具合はいずれも著しく、利用頻度の高さが窺える。真珠道が整備されたといわれる1522年以来、多くの人々が様々な目的でこの道路を利用しており、消耗の状況に応じて道の整備が複数回行なわれたことが想定されるが、今回の調査範囲においてそうした痕跡は確認できなかった。いずれにしても検出した石畳は敷設の際に様々な工夫がみられ、その工事技術の高さと人々の苦労が偲ばれる。

今回の調査では表土掘削がなかったせいもあるが、出土遺物があまり多くない。表面清掃で出土した遺物は、近世から現代までのものが雑多に見られ、道が長期間にわたって使用されていた状況を表している。石畳の造成層からの出土数は特に少なく、造成する際に余計なものがあまり混ざらないよう意識的に造成された可能性も考えられる。

識名坂はかつて道に沿って松が植えられており、眺望に富んだ場所であったというが、その松は戦中に資材として多くが切り出され、残りも戦火で全て焼失している。その後1950年代に車両通行ができるようにコンクリート舗装道路になるまでは石畳が残っていた。地元ではかつて石畳道を歩いた記憶を持つ方々もまだ多く、字の指定文化財として愛されている。新しい道路整備によって石畳は原位置から失われることになったが、地元住民の要望によって新しい歩道の一部に移設され、現地にてオリジナルの石畳を見ることができるようになっている。文化財を身近に感じてもらうスポットとして今後活用していきたい。

真珠道はそのルート全体は周知されているものの、石畳などの遺構については首里城周辺部分や首里金城町石畳道を除いては残存状況が不明な部分が多い。本遺跡もコンクリート舗装道路の下から検出されており、発見当初は新聞報道されるなど市民の関心を集めた。私にとっては、既設の道路や建造物の有無に関わらず、文化財の残存する可能性を常に考えなければならないことを再認識させてもらった思い出深い遺跡である。

参考文献:

- 沖縄県立埋蔵文化財センター2007「真珠道跡」沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第42集
那覇市教育委員会2007「那覇市の文化財」
那覇市2020「真珠道跡(識名坂地区)」那覇市文化財調査報告書 第112集

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは山道 峻さんです。

考古学者の書棚

セッション1「種子島広田遺跡の研究—琉球列島における広田人の形質・技術的特徴、移動—」

木下尚子他 著／日本考古学協会2020年総会 発表要旨(2020) 忍澤 成視

◇開催中止となった同学会セッションの紹介

1 種子島広田遺跡の研究—琉球列島における広田人の形質・技術的特徴、移動—(木下尚子)

広田遺跡は、種子島南東の海岸至近に立地する、約1,700年前から1,300年前(弥生時代終末期～古墳時代)にかけての集団埋葬墓の遺跡である。台風に伴う海岸近くの崖崩れで偶然発見され、昭和32(1958)年～平成18(2006)年まで5次に及ぶ発掘調査が行われ、90基の墓と157体の人骨、4万5千点の貝製品が出土した。貝製品は人骨に副葬されたもので、その素材貝はゴホウラ、イモガイ、オオツタノハ、ニシキツノガイなど、自前では入手できないものも多く利用していた。また、その内容は腕輪、垂飾など多彩で、竜佩形(りゅうがいはい)と称する特殊な形態、幾何学的文様が彫刻された貝符など、この遺跡ならではの製品も多く、独特な貝文化を育んだ集団として古くから留意されてきた。これらは、日本列島で他に例のないものであることから、平成20(2008)年に国指定史跡に、平成21(2009)年に出土遺物が重要文化財に指定されている。

近年、奄美・沖縄地域では、広田遺跡との関係を示す遺物が多く検出され、両者の関係が明らかとなり、また広田人の装身具の系譜を南島から説明する試みや、古墳時代の種子島が貝交易の中継地であったことを評価し、その装身文化は鉄器を入手した広田人によって独自に生み出されたとする考えが提起されている。副葬された貝輪、貝符、竜佩型垂飾などの装飾品の組合せや奄美・沖縄、大隅諸島起源の多様な素材貝の使われ方の変遷から、人や文化の融合の様子を解き明かそうとするものである。

一方、その人骨の形質について、奄美・沖縄との比較及び新たな分析手法による人類学的研究も進められている。そして、①広田人の人類学的検討、②貝符製作技術の復元、③貝製品素材貝採取行為の追跡に焦点を当てた科学研究費による共同研究が2017年から3か年かけておこなわれることになった。

2 広田人の日常生活と交流の実態—広田遺跡・鳥ノ峯遺跡出土人骨の自然人類学的研究成果—(高椋浩史他)

広田人については、これまでに出土人骨のDNA研究、安定同位体分析に基づく食性研究がおこなわれ、墓域内に埋葬された集団の出自や関係性を明らかにする試みが続けられている。今回のプロジェクトでは、人骨の形質に残る痕跡の分析により、人工的な頭蓋変形の様子、栄養・環境・病気に起因するストレス痕跡の様子、人為的、自然的な要因による外傷や骨変形の状態の様子、そして、筋骨格の発達度合いから生前の生活の様子や生業スタイルの復元がおこなわれた。また、人骨内部に残るストロンチウム同位体分析によって、人の移動や交流、生活・生育圏を解明しようとする新たな試みもおこなわれている。

3 土器の型式と胎土分析を通してみた広田人の移動痕跡(石堂和博他)

鳥ノ峯式、広田式、上能野式など大隅諸島独自の土器胎土を中性子放射化分析することにより、貝製品素材や製品をめぐ

る種子島人の動きを探った。種子島広田遺跡、鳥ノ峯遺跡の墓群別の土器、そして沖縄諸島遺跡出土の大隅諸島系土器の胎土を分析した。資料的制約により、継続調査を要する。

4 貝符製作技術の復元的研究—広田遺跡と奄美・沖縄諸島の事例から—(山野ケン陽次郎)

広田遺跡の象徴的遺物に手の込んだ彫刻文様を施した「貝符」がある。近年、これらの細工には金属工具が用いられたとの見解があるが、まだその分析研究はない。古墳時代、種子島では鉄生産の明確な痕跡はなく、鉄製工具有無の問題は、九州島以北の古墳築造地域との交流・交易内容を復元する上でも重要な課題である。イモガイの体層部素材を用いて貝符レプリカを作製、これと遺跡出土遺物の細部を詳細に比較検証した結果、彫刻文様の施文には、ある程度までは種子島産の硬質砂岩などでも可能だが、完成には鉄製工具の存在が不可欠であることが判明した。

5 広田遺跡のオオツタノハ製貝輪—種子島産貝輪素材の利用実態を探る—(忍澤成視)

埋葬人骨の腕に装着した状態で見つかった400点以上の貝輪の貝種には、イモガイ・ゴホウラ・オオツタノハ・オニニシ・ボウシュウボラ・ギンタカハマがある。このうち主体をなすのは、ゴホウラとオオツタノハで、ほぼ同数が使用されていた。

オオツタノハは、縄文時代以来貝輪専用に使われた貝種のうち、大きさ、かたち、重量、デザイン(外面の独特の文様と内面光沢)、そして殻質が最も優れている。厚く緻密で粘り強い殻質は、敲打主体の穿孔に耐え、製品となってからも容易に破損することがない。この殻質は、縄文時代貝輪の主体であるベンケイガイに似るが、貝殻文様のデザイン性と、何より日本列島の極めて限定された島嶼部海域のみに生息し、しかも荒波打ち寄せの危険な岩礁地帯にのみ生息し、極めて採取困難という希少性は、唯一無二の価値観を生んだであろうことは容易に想像できる。

海岸を眼前に見据えた墓地に眠る広田人の半数が、男女ともに腕に装着していたオオツタノハ製の貝輪。彼らが身に付けていた膨大な数の貝製装身具のうち、種子島産とみられる「土着」素材の代表はオオツタノハだ。身近な素材でありながら入手困難で、貝輪にふさわしい良質で大型の個体獲得には、この貝に対する豊富な知識と経験が必要であった。入念に研磨し、独特の風合いにデザインされた貝輪は、まさに種子島の人びと、広田人のアイデンティティーの象徴であり、外来素材であるゴホウラとの差別化、他者へのアピールにも使われたのだろう。超大型の貝輪素材が、著しく老成であることは、貝殻の成長速度や貝殻の厚さ、表面の様子から識別できたはずなので、長寿の証や生命力のシンボルとしての意味合いが込められていたのかもしれない。

アルカ通信 No.204

発行日 2020年9月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801
長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp
URL : http://www.aruka.co.jp